様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２５ 日現在

機関番号：１７３０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１２８６６

研究課題名（和文）第二次大戦期スイスのラジオ戦争－フォン・ザリスのニュース「世界年代記」を事例に

研究課題名（英文）Radio-war of Switzerland during World War II-a case study of "World Chronicle" of von Salis

研究代表者
葉柳　和則（HAYANAGI, Kazunori）

長崎大学・多文化社会学部・教授

研究者番号：７０３３２８５６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：第二次世界大戦においては、プロパガンダが本格的に繰り広げられた。その主要なメディアの1つがラジオである。イギリスのBBCとドイツの宣伝省のあいだのラジオによるプロパガンダ合戦、すなわち、ラジオ戦争については数多くの研究がある。しかし、同時代にスイスが中立の立場から、戦況を報道した週間ニュース番組、「世界クロニクル」の政治的・文化的位置についてはほとんど研究されていない。番組のライターでありキャスターでもあった歴史学者Jean Rudolf von Salisが残した放送原稿を読み解くことによって、テクストの生成と番組のもたらした作用を読み解いていった。

研究成果の概要（英文）：In the Second World War, propaganda got into full swing. One of the major media of it was the radio. There are numerous studies on the propaganda battle by radio between the British BBC and the Reich Ministry of Public Enlightenment and Propaganda, namely the radio war. However, little research has been done on the political / cultural position of the weekly news program, "World Chronicle", which Switzerland put on the air from its neutral stance and which reported on the war situation. By understanding the broadcast manuscript left by the historian Jean Rudolf von Salis who was a program writer and also a caster, I figures out he origination and effect of the manuscript and its broadcasting.

研究分野：文化研究

キーワード：ラジオ　スイス　表象　記憶

１．研究開始当初の背景

枢軸国対連合国、ドイツ対イギリスといった大国中心の文化史研究において周縁化される傾向の強いスイスの文化政策に焦点を当てることによって、従来の二項対立的な説明図式に第三項を導入する。スイスは第二次世界大戦の直接的な当事国ではなかったがゆえに、とりわけ大戦期のメディアや文化についての研究においては、考察の埒外に置かれる傾向が強い。しかし、中立国であるがゆえに、枢軸国、連合国双方の情報にアクセスしうるスイスが発信する情報は、とりわけ厳しい情報統制下にあった枢軸国占領地域においては、戦争の現状と世界の政治情勢を知る上で貴重なものであった。本研究は、電波を媒体にするがゆえに最も容易に国境を越えることのできるラジオ放送に着目することによって、スイスの情報発信の具体的内容とそのインパクトを、ヨーロッパの文化史研究の中に位置づけること特徴とする。

２．研究の目的

本研究の目的は、20 世紀のスイスで展開された半官半民の愛国的文化運動である「精神的国土防衛」を補助線として、①第二次大戦期のスイスのラジオニュース「世界年代記(Weltchronik)」、②および番組のテクスト作成者兼キャスターであった歴史学者 J. R. フォン・ザリス(Jean Rudolf von Salis, 1901-1996)の言説と行動の持つ文化政治史的位置を明らかにすることである。これを通して、ドイツやイギリスのプロパガンダ研究の影に隠れて、スイス本国においてすら十分に研究されていない、大戦期スイスのプロパガンダ戦略の一端を明らかにするのみならず、隣接する大国の言語文化と不可分の関係にありながら、同時にそれらから独立性を保ちつつ三つの言語圏を統合することを不可避とするスイスの文化政策の歴史とその意義を実証的に明らかにすることができる。

３．研究の方法

平成 27 年度は、既に公刊されている資料の収集と分析、および研究の枠組の構築が中心となる。研究代表者は、マックス・フリッシュとチューリヒ劇場の関係を軸にして精神的国土防衛に関する研究枠組を整備してきたが、フォン・ザーリスのような文化政策の担い手の言説を研究するための方法、メディア論のラジオ研究の成果を組み込む方途などの検討が必要である。この検討を通して作り上げた調査モデルにもとづいて、平成 28 年度の上半期にベルンのスイス文学アーカイブにおいて資料調査を行い、年度の上半期にその概要を研究会等において発表する。平成 29 年度の上半期は、資料の再検討とベルンとチューリヒでの補足調査を実施した。スイス文学アーカイブは資料の複写が不可であり、閲覧した資料の重要箇所を手作業でノートテイキングする必要があり、チューリヒ市アーカイブは、1950 年代以前の資料に関して原則写真撮影のみを許可している。そのため資料収集に多大な時間を要したが、他方でこれまでドイツ語圏の研究者も利用してこなかった資料に基づく研究が可能になった。資料の分析の結果得られた主要な成果を『多文化社会研究』（長崎大学多文化社会学部）と『独文学報』（大阪大学ドイツ文学会）に投稿する。

４．研究成果

(1)生成の文脈

「世界クロニクル」が多くのリスナーを引きつけるようになったのは、チューリヒ工科大学の歴史学教授ジャン・ルードルフ・フォン・ザーリスがライター兼キャスターに就任してからである。フォン・ザーリスは 1940 年 4 月 30 日から、番組自体が終了した 1947 年 4 月 18 日までの期間、担当者を務め、金曜日から木曜日の一週間に起きた出来事を要約し、解説を付すウィークリー・ニュースの形式を確立した。したがって、「世界クロニクル」という言葉は、一般には彼が担当した時期の放送を指している。

フォン・ザーリスは、彼に可能な範囲で、世界情勢に関する情報を収集・整理し、これを抑制された声で電波に乗せた。ドイツ帝国放送協会（RRG）と（BBC）の放送がプロパガンダ合戦の様相を呈していたのに対し、「世界クロニクル」は客観、中立、公正という公準にできる限り沿ったコンテンツを特徴としていた。

ところが、国民啓蒙宣伝省の大臣ヨーゼフ・ゲッベルス Joseph Goebbels (1897-1945) は、「世界クロニクル」を問題視し、スイスに番組を中止するよう要請した。第二次世界大戦の勃発と同時に、ゲッベルスはドイツ国民およびドイツ占領地域の住民に外国のラジオ番組を聴取することを禁止したが、その中でも BBC と並んでラジオ・ベロミュンスターを最も警戒すべき「敵性放送局」(Feindsender)と見なしていた。ベロミュンスターの電波は、ヨーロッパはもちろんのこと、北アフリカ周辺においても受信することができ、RRG が発信するヨーロッパ戦線の状勢とは、大きく異なった現実をリスナーが知ることになったからである。

「世界クロニクル」は、RRG のプロパガンダや BBC の対抗的プロパガンダと異なり、あからさまに政治的バイアスのかかった宣伝戦を展開したわけではない。すなわち、電波に乗せられた言葉のデノテーションは決してプロパガンダ的ではなかった。しかし、可能な限り中立的な姿勢で報道することが、結果的に RRG のプロパガンダを、それどころか時には BBC の放送内容すらも相対化すること

によって、別様の現実の在処を指し示すことになった。これこそがナチス・ドイツにとって「敵性的」な振る舞いだったのである。とすれば、「世界クロニクル」がいかなる性格をもったニュース番組であったのかを解明することによって、「RRG 対 BBC」という図式で論じられることの多い第二次世界大戦期のプロパガンダ戦に関する構図を描き直すことができた。

他方、当時のスイス人にとって、ベロミュンスターは、スイスのナショナル・アイデンティティを象徴するものとなっていった。「〈ベロミュンスター〉はラジオそのもの、マスメディアそのものだった」、「ラジオ・ベロミュンスターは（中略）スイス的基準線として機能した。これは独占的なラジオがマスメディアとして果たした特筆すべき功績であった。そこにこそ、〈ベロミュンスター〉の神話は根拠を持っている」といった言葉がこれを証ししている。

ベロミュンスターの番組は、国内向けニュース、クラシック音楽、スイスの民俗音楽、天気予報から、動員中の兵士向けの特別番組「部隊から故郷へ」 まで多岐にわたるが、その中でスイスのナショナル・アイデンティティをとりわけ明瞭に体現した番組と見なされていたのが「世界クロニクル」であったことが明らかとなった。

(2)検閲

1939 年 8 月 29 日、ナチス・ドイツのポーランド侵攻が確実視されるようになったことを受け、スイス政府は 9 月 2 日にスイスラジオ協会（SRG）の活動を停止させ、その管理部門スイス・ラジオサービスを政府の直接の管轄下に置いた。この時期のスイスにおいて検閲を担当していたのはスイス軍参謀本部の「出版とラジオ部門」die Abteilung Presse und Funkspruch であった。これに基づいて、スイス政府は 1940 年の 1 月に「今日の時局におけるプログラム編成のための指針」Richtlinien für die Programmgestaltung im heutigen Zeitgeschehen を公布し、同年 10 月には「隣国」とその同盟国に関する報道の際に「強度の自制」を求める通達をラジオ局に送った。

政治的な内容を含むラジオ番組に対する検閲に関して特徴的なのは、それが「事前検閲」Vorzensur であったことである。スイス政府は基本的に「事後検閲」Nachzensur を方針として打ち出していた。それゆえ、新聞、雑誌、書籍、映画、演劇等の広義のメディアは、出版ないし上演の後で、「出版とラジオ部門」の検閲を受けていた。つまり、検閲当局が事前に直接、出版・上演の可否を判断したり、修正や削除を指示したりするのではなく、出版者や芸術家が精神的国土防衛の理念を踏まえて、事前に「自己検閲」Seblstzensur することが暗黙のうちに求められていたのである。これとは対照的に、ラジオに関してのみ事前検閲の体制が取られていたのは、「エーテル波」を媒体とするラジオ放送の場合、一度送信されてしまうと修正や削除は不可能であり、その影響は即座に国境を越えて広がっていくからである。

フォン・ザーリスは「世界クロニクル」に対する検閲について、内容に関して強い検閲が行われた場合には、自分から降板すると宣告していた。

放送が始まってみると、内容に立ち入った検閲は稀にしか行われなかった。ときおりは文体上の変更や削除が指示されていることもあった。

検閲の問題は、フォン・ザーリスが金曜日の朝に放送原稿を書いてから、それが 19 時 10 分にマイクの前で彼自身によって読み上げられるまでのプロセスに集約的に現れている。原稿を書き終えたフォン・ザーリスは、11 時 25 分発の急行に間に合うようチューリヒ駅に急ぎ、速達便でベルンにあるスイス・ラジオサービスの管理部に原稿を送った。ベルンで検閲を受けた原稿は、同じく速達便でチューリヒのスタジオに返送され、18 時までには「ベルンにて、閲読済み」、「ベルンより、問題なし」といったメモの記された原稿がフォン・ザーリスの執務机の上に置かれた。彼は、放送開始まで約 1 時間、原稿に最終的な推敲を施した 。このプロセスが週に 1 回、5 年にわたって続けられた。スイスの鉄道網の充実と時間に厳格な国民性、そして戦争に直接巻き込まれていないがゆえの定時運行があってはじめて可能な検閲方法であった。

「世界クロニクル」に対するこうした検閲の痕跡に変化が生じるのは、1943 年の初頭である。1943 年の放送は、1 月 8 日から開始される。この回の放送原稿、および翌 2 月 12 日の放送を最後に、スイス・ラジオサービスによる検閲の痕跡は放送原稿のテクスト上から姿を消す。

1943 年はナチス・ドイツが 1940 年に立案したスイス占領計画、「樅の木作戦」が遂行不可能になった年である。ナチス時代におけるスイスの検閲体制は、「ドイツにスイス侵攻の口実を与えること」を避けるために実施されていた。したがって、スイス軍の「出版とラジオ部門」が「世界クロニクル」に対する検閲を停止し、ドイツに対する配慮なしに中立国のプロパガンダを展開しうる政治的コンテクストが生まれたのが 1943 年だったのである。

(3)受容

「世界クロニクル」の放送が枢軸国に対する「パルチザン活動」と見なしうるかどうかについては、今後の検証を待たねばならない。ただ、一つだけ確かなことは、「ベルリンを怒らせない」ための事前検閲と自己検閲が生み出す、抑制された文体にもかかわらず、フォン・ザーリスの声は、スイスの人びとのナショナルな結束を強め、国外のリスナー、と

りわけドイツ占領地域のリスナーたちを鼓舞し続けたという事実である。
たとえばオランダで身を潜めていたドイツ系ユダヤ人、ハインツ・グラウマン Heinz Graumann は 1945 年 5 月 24 日付けの手紙に次のように書いている。

> プロパガンダ的な感じはまったくありませんでした。感じたのは、私情を交えない事実についての報告、戦争のない国の声、明晰さ、視野の広さでした。もちろん政治的な意味での慎重な言い回しがされていましたが、それでも真実に対する良心を、さらに言えば人間という存在に対する思慮をいつも感じ取ることができました。まさにそれゆえにこそ、あなたの言葉はかくも大切だったのです。私たちは誓約者同盟［スイスの正式名称］のみなさんの心の温かさを感じ、同時に、中立を守り、客観性を確保しようと努めている知識人の比類なき学識に基づく言葉を聞いたのです。(Graumann 1945)

ここからは、「検閲は文体を洗練させる」というフォン・ザーリスの方法が、国外のリスナーたちに十分に理解されていたことをうかがい知ることができる。

(4)到達点と今後の課題
　本研究では、「世界クロニクル」というラジオ番組が放送された社会的・政治的コンテクストを把握するとともに、検閲の過程に焦点を当てて、テクストとしての放送原稿の生成過程に働く諸要因の関係性を明らかにした。しかし、たとえばノルマンディー上陸作戦をこの番組がどのように報じたのかといった、第二次世界大戦期の主要な出来事に関する中立のプロパガンダについての具体的な読解は例示的に行うにとどまった。さらに言えば、この番組が第二次世界大戦中、国内外でどのように聴取されていたのかという同時代における受容の問題、戦後、精神的国土防衛が反共主義へと性格を変えていく中で、この番組が展開した中立のディスクールがどのように評価されたのかという事後的な受容の問題等、今後の課題は数多く残されている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

①<u>葉柳和則</u>: 「スイスのラジオ戦争 Jean Rudolf von Salis の「世界クロニクル」のテクストとコンテクスト」,『独文学報』(大阪大学ドイツ文学会), 第 34 号、掲載決定、2018 年, 査読有.

②<u>葉柳和則</u>: 「中立のディスクール--第二次大戦期スイスのラジオ・ニュース『世界クロニクル』の政治-文化史的位置」,『多文化社会研究』(長崎大学多文化社会学部), 第 4 号, pp. 287-304, 2018 年, 査読無.

〔学会発表〕（計 1 件）

①<u>葉柳和則</u>: 「検閲が終わったとき --Jean Rudolf von Salis の「世界クロニクル」における多声性の岐路」, 公開ワークショップ:「「順応と抵抗」をめぐる文化の政治」, 2018 年 3 月 18 日, 名古屋大学（愛知県名古屋市）

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等　　なし

６．研究組織
(1)研究代表者
葉柳 和則（HAYANAGI, Kazunori）
長崎大学・多文化社会学部・教授
　研究者番号：70332856

(2)研究分担者
　　なし

(3)連携研究者
　　なし

(4)研究協力者
　　なし